



由云行馬琴藏并
其角文集類柑子
下

T

特別
~5
6088
3



15
6088
3



類柑文集下



鬪雞之戲玩尚矣李邵之芥羽
金距之後唐皇盛於此在千傳
賦韓聯杜律之景則是戲玩千
騷壇者而共載籍之所見歷々
焉我朝雖未聞其權輿堂上
以及星門為佳節桃園之戲玩
也又已舊而前記之所錄可以
見其概也今茲彌生之初
公庭漱芳之餘取題於此延彼

魚目堂

54-8584

晉子，襟以從革，而恢鼓，俳背，或
有七步而吐，五六調，或有十步
而發，二三曲間，有執一者，以夜
既闌，意始倦，而各歇，搏咏多寡
混，合積壹百有卅奇，而公裁
居其半，至於遺詞，名字之競，變
態，則所謂五百兒之羽儀，森々
屯其中，是所以追於佳節之典
故，摠於桃園之賀，趣而戲，玩之
趨雅，致者，歟，逮使再煩，晉子而

後偶立，篇分篇得，羨名而勇怯
之品，級進退之點，廢判然，破竹
歎玉，是又可謂諧體之新奇，吟
房之希珍者，然非與甲申暮春
下浣百之叙

當時ハ形の点斑用ゆへにれども甲し乃
昔のやうにあたりて充尖の力合合たり
一生變りの假名を正し所生の實名を
こゝろより一手くの名はひろひのや
珍禽怪鳥の品を定むりては徳書の
大寄をれそ何よりふれり海くても目
くれ心もみれは且知鶴のうらくしふ
よそもすめし亦くやうの座の
徳書の三十五谷をのりは廿五合
とすの小侍佐のきみおの尾いし
おすれある方人なれを則二巻の巻号
とす物加和の巻人筆よりし

二合

御笠をすて撮^{ツミ}かあすや 花冠^リ 百之
戴冠文とす

たれ^タあ^アよ^ヨや^ヤそ^ソく^クく^ク 喉^{ノド}目^メの^ノあ^ア 里^リ
捕^ツ距^キ或^チトス

左の座は着らるる大臣の多し
距亦、爽下ふとくわたり字義
花冠トサカ朱冠サカとあせんとあ心
あは是を文とす左は源平乃
或は右の座につけては羽翼
をひつくりあすあたり 是を勇と
すはあふれくとかおはしはあは
文は兼ゆて太平の時を唱ふ

山
三合

廣庭より風の輝尾の進こか 雪花

し字とく

敵感もしすすくあや志賀の種 里

五字トス

風波ともふ揮ハッて花もうちむ乃淡
輪を思ひりまほのてり尾も尾もあひ
つせりも半合其争ひ君子のをり
上下の貴賤あれを是よと論らるる
もせはゆる心ある者もてはくくの
技をねて右へりしをるれり

志賀之助小上こそすのる

四合

炭吟の巻あふく世初うひか 吾子

し字とく

十月、秋の目てあきとと誕生丸 里

二字トス

豫譲り昔輝追でけりぬ餅とく
其竟此名は化ら多難を報へか
てて蜀規のちあらあらるる血平
啼らあら子相あ血あ鳴や兵
し九の男の通り称園のこ名將
鎗下の名の晚世まひて其月
其の目と時をあらせて信あり

五合

し字とく

漣坊り汗を志つじ 羽ゆる子 何虹

し字をい

分^ヨ距^ヨ脱て米^ヨあ^ヨく^ヨう^ヨい^ヨあ^ヨ 星

同

只白旗まつけとの所詭宣あやうとも
ゆるゆるいをなまのせて控沈の所
前子て赤白の務負せし赤羽も
ゆるすとや其中ふ搦屋出の上白と
名あて七羽の中は大力

ああもこれよほまゝなり

六合

弱^ヨ多^ヨ和^ヨく^ヨも^ヨ兼^ヨ仕^ヨり^ヨも^ヨい^ヨ退^ヨ

し字

星

莖餅 けふ乃もうふ宥一なり 習魚

同

遍照寺のけいけい法師はとみむて左
を抱へて速く走るふ衣をかきれて唯ハ
のいぬとるいり日比法をを飼あつけ
て恐るき罪つくりきると大雁たの
筆の終りありけれも只と貫いせ
しりしもみ末心もとま

七合

し字をい

黄莖餅まくれ育とみむて存鳥骨給丸
と製法せしころゆるめ志しりて婦人
虚弱の力と成るこれ推り力なり

只今ののち柄了を命真加あま

砂渦やつよきりあを 一規 里

五字

毛衣子 腹黒子 名を雪めける 晋子

し字

俵の末孫 膝太 命と名をあて 五白子 上り
砂水子 むき入 入むるの羽音 之陣 比
類を 右ハ名 出く なるて 人 中
志 くれす 骨を 烏 武者と ころり 指
さ せ 毛衣 強り して 今 簪 山
小 排 徊 せ しく 忽 ち 其 耻 を 雪 め べ り
け 後 藥 劑 の 陣 へ を む べ り べ

八合

扮られて 毛足 松の みるり 白梅

遠く 蒔ヶ梅 の下 ちむ 鳥乃 米 里

左右し字

志賀の 関 脇 唐 崎 ひ ち ら 松 じ り び ば し
け ち 今 一 一 ぼ の ち ち ち ち ち ち ち ち ち
方 子 風 あ げ を 梅 乃 下 ち ち 鹿 乃 乃
上 毛 子 花 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
鳥 窟 源 の 仲 正 の 技 持 す ち ち ち ち ち ち
松 ち 梅 ち ち 中 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
技 持 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
九 合

比首尾を 狐ちちちて 歩前 負 里

二字

喰扱乃羽實檢や臨次のもも 志水

屯

さんくの首尾昔男の名もほれりりふ
ぬ才羽羽帯の年本と成てうつら
自才いありうやりのるせきの恨と
しる所心よりい負成し(雲下の瑕瑾
みもあらしと名よ力を付てもひり

十合

名系せん三枚朱冠^サをこつ^カの山 里

二字とす

めつ勝園鷄野の筋と召れりり習魚

乙字

巖切左右こころあげ大お發つらうて

ある有様三やいさりの見泰と三番
うつ三山と名系角あるもあく角牙
あるものく牙見りりくまは園鷄野の
あし自入より片けの小標もさるあ
才よりりとあん津玉乃片け地ハ昔
黒主鹿をゆめりよりま野と危付
古字のく園鷄とよりるふ元合りり
一作小錐目よりる

十一合

勝らう魚薩摩よおぬて扇多 百猿

左右乙字

入首、胡椒江巾の羽ゆちを 里

小勝らうをれり者汝ハ一の勝まと

あつり破れし事の時又破楚の大
元帥と記されし事なり才子し
此立り内服へつて扇をの太兵
琉球の辰胤薩守我有といひ
隠波北小島の荒者し政控りの上
はつと入所をちまうへり
むし才如椒軍一う家

十二合

辰下

裁片けの足又覚悟や一筆一囊

し字とす

取放し佐理るハゆくの合せ標

里

捕距哉トス

たちつけの神田舎りるとみしり草

足とのせりあひつり引ひきとまひとすぬ
右も又八くもつらあし佐理領舟橋より
出で標面子合せその数極すり侍る小
いつくく取放しつりとやんるも鳥ハ
無し亦元離しのも用をとあつりよ
とり放しつらあしとせまのくゆはり
味すしきさるあつりよの心も改すり
孫と作せりつて歩履義下りけり
一扇をちまひ思

十三合

里

音ひたう所東合や羽衣乃曲
柳う樹をつつと合せしゆ尾うか
た右二字

吾書合の曲流音をたると乃る自家
ひるく寸羽の目らりて波玄宗乃
さりのきこみ以てまいつる合せのあり
両片の柳乃みくら東のつる西の片
を遅速のりく寸其羽其尾ともふ

凡流陣

十四合 左 二字

刻で入るる身を冠も箕手か 正月子

距筋の子はあまきりり 小屋 雪花

ふらふの也すひりりをほむお箕手

かろ所もくひああるくくすく

志下り子翳るふあは してあつる

も心ゆて其せき鵬雛乃奇を

あはれ 沙千の小貝をりる拳よのせて鵲
のし花冠はくく唐千の米ほ

十五合

角も一や三の凡の弱くろろ 明言

屯

とつむすみ植毛乃凡や 要石 焉子

乙字

凡子の字抑して進と出るるよ力

定くはて勝車とみくり年功

れく執り守りしちち石四結を免て

ちのとも動うは神の力乃あらしむ

荒言を

十六合

三

支毛をく漆ぬりきん 惣中より 雲花

ひ字とひ

油符 神廻 合せとをい 意の次抱 里

半面義人印

大黒瓦の塗桶とへも大津よ隠を
のれを投所と口をぬゆつて大坂よ
濡髪いつきも支毛をきく名をき
為家將のこあゆみおのをのりかき
似せもしの味めると志くれあけ
のりくらし 嘴太をあさむく
節令を召れけるより 枕九席と段より
油虫の將軍三郎との鳥帽子揚の陰よ
泊筆が旗よりあけぬるふたより

ちく推参りし調の二はゆきとあを
されをばより天下一

十七合

大鋸の血ハ涿鹿ノ戸板楯

毎雨

左右
二字

次田町の葉虫より古戦場 里

くくろくの地古戦場を納り市間
子戸を真と巷よ葉屑を掃其代め
窮鳥ハ寒夜の鼻よ煮られと乃世を
圖難ハ温光の莖よ肥より世持を

十八合

りしちちあふふやそ 罪のふ 里

二字とす

琉球の獅子油や漆あさん 立朝

乙字

帰國の序土産として言麗の本雞乃
く多十つ十をかきあけり村里の時
を報して此調の鳥をいふ其の中にも
牛と以てさるゝハ唐獅子も羽毛を膏
くく多のて黒牡丹とよめしこれ敵乃
鉄嘴をすべらりし剛喙の力をうむ
はんとの討てもさるゝををしこれと
かゝりものありしよけをされ侍り

十九合

左右捕距並とす

はろり距や目一枕十三羽 素琴

手塚のよつあむ所を二けつめ

星

形容鬚羽飛鳥のうけをれをくく
れりかの小男といへ今らるる名のうけは
一の業子記す右ハ鴨雄の中よりいへ
らしをへてそし世を念はらとありや
つゆ鳥も心をうけりて物子感する所
時よとつてのまん氣聖く大る子成て
はけしきるういへり出ててと糸
糸を分つてめとと流田山の錦羽成
ひるりして名未代と有る乃
一番終と記せり

廿合

左右
二家

負関く逆摺とんと切戸引

欣以

風流を務テ大振羽の黄彩カニハツク唯 里

笑の筈の景因ッ笑先を何ッそよ一二の
うけニ番終と評定一侍りニ字云

勝浦の目出な及たより揚間陣も
ちつされぬそのち十八九斗ある女房の
大なり羽をひるひりして陸の与一を招
きしあそびひば扇を封じり
舟りこを多しいてかめものも

鬘毛や元もの〜るを乃 髪 洞滴
し字と書

目包のい〜きも〜や お寄 笠 里
ニ字と云

と日とつらつせと花うつせよとあ〜あを
〜ら甲〜と朱冠元〜し〜ら老すあひ乃
その笑とい仰山しくれぬともや
多登出の箸鷹を〜のりひ〜合せ
出〜る小侍長 げ目包もす〜と手雄
なれと心乃と下り出をと〜んとあひ乃
子下笠を敲りておむ〜をさうり
陣中〜さかたせせける一ツの計し

尾テノヒラ裁几掌テノヒラ心くせ 初 合せ 里

進む氣の鑼子ヲメたる板尾ヲ 卍 卍
乙字

二補の昔何あうれとくふつとくあひ
 より鶴鶴靈鳥とて事称やうる雄
 唯こいす交合比翼のりうちもを
 漸く長しと鳴尾さし尾を尾
 うあてありみれをす其す男色そ
 かけあひしはし程あく血気壯は骨肉
 たくあしと申て初生合接の心はしを忘
 けしと事好くすらすとて日く少事
 の春を惜りる思ひ深察すし各十六
 とく下初る合す枝尾の毛接合する
 進退節よあしとけりといしと進
 氣あきあれとて
 廿三合

羽さけひやうれもあしり菖蒲草 星

五字とす右二字
 赤白も紅の鹿子乃くくふりふ言志
 先年

白鶴の碁石よあぬ菊のつゆ 晉
 げあうと抜群をれを碁石をを
 ありし者信黒毛よ白のこしとあを
 除くか者者しをあれり曹へるはる
 さらあ華は似たりとよりして八幡黒
 と名あて務負すしとあ下知み付
 けりり水白ハ味方の交り毛あう紅
 くとあきみと右は付しと引分
 たり羽時遠鳴りて面よむりあはる

廿四合

六宮乃窠くあつて俗毛を如
地下の寄、蜉の糧を包まけり

た二字右し字

右此
百之

鸚鵡局中よ飛入て双六の道を崩し
あるたれし用元の遺事と電愛一身よ
ありと六宮よあふるあふる義毛一六
のあつてしつゝ氣を吞三日、沙盪つてし物
ありとあふるあふる飛揚及動心を碎
さむ井窠乃よつちとこ也

田舎とあふるあふるを於て骨あふる物
かれと蛙歩食雜漏れ喰つて羽出り
やの毛生ん苦及牛房銘目引鼻引

廿五合

笑ひ字こらん花のあつりの氣でして

目啄を當り仕うとせ權五布

呈

揮距曲とん

景清うくらりやけ粧けつめ 唄言

し字とん 當ハ正當三月三日とけり
其箭三日三夜もつて口りしハくらりと
あふる厨川のつらものさの海と名を
あふる大鳥よ合せてさるあふる何某も
あふる家の家雜清とて知を双し兵
老のさの泪よくれて音忘れぬも柄坐
けまらとふくや

廿六合 左し字

分ら身をて搦をほくく阿より外 幽洞

右屯

捕、後、これハ雉とそニけあふ 里

以るゆらむの山風をけきま合を分
て目うたはの陣は角を鳴一羽を揮て
揺られむと也衛とあふ系橋これと
搦りうけあむまうこれらめて尻を
せ雉とハるくくの洞に臆して今
一番ともいふとみりしに妙あやするは
るれやほくくはきくこれとくく後
。う筒はくきくくくく

サ七台

炭桶へあけて物をし 固炭朱冠 笹分

嘴利、乃弓をくあはる 地すり外 雪花

左し字 右し字トス

たごんとりあも一名のし神さう法楽
知をこのま取え本在御堂おひあり
地摺ハ敵をういそりくかあて息次
の功者くくれて志にむろくす尻
志すりて物をく炭筋をく連り
志にし扇いて一枚の礼物

廿八合

御昆且の尻は 荊朝くるもこれ 百之

し字とす

ハアカとて初め笑ひり 名ハ物 里

五字 寛長

戸のそとへ思ひめぐりて利気大切
のふすまのふちをよむとて入乃
はつひさるまはしむた右勝負をし

三十二合

切声や背を三ツ伏せのいきり物 洞滴

左右二字

ちやくりむせや中矯器をけり 里

三伏のわりを中れ玉うつともり
へき利口の糸合針穴免毫乃争ひ
精神地こしむ先き座交すまの
の陸一とす

こつ指をあくれを七尺の屏風ふ躍り
斤よよのすれを四面の楚歌よ舞とむ

中へくしや中節きの日よあやとら
説もある面白 志やくりあはるまを
おほするあはるを小腕の勝負あり
ちやまたのそりや筋や狂作

さもはるまはしむ

三十二合 左右二字

歌うきて十日坊主や桃くれ 里

老鳥のくふるやちを固本丹 晋子

朝鮮国子沙門あり形ちんありとて小
はしりて人を皆雑僧と云り吾毒も
野三左あう哥の南京吉兵衛り踊り
風流も其形似しる後とて十日坊

はふらふらものしありかへん老より
資朝つよしとくおもたれ侍る噺り
あひくしはれとて世の思ひ出平
はとりしてあそとんやて伏元本幡の
瘦る兩居竹林の祢かぬあまう夢
巢守子の親を好き猫悪いと叫ば
其日の遊具を憐れり仙縁のあり
あやき白紙を波葉よ添て楽

竊りなり

卅四合 左文右武共ニ三字

大玉子 原平 香乃 目れもふ 星

義の端の高る思ひを替るより 習魚

酒シ般シ若湯シ雞シ鎖サ箭リ菜サとひひうてハ
出字のうくし喰するを東坡居士暹の
ととらゆし長暮ハ履 ちとり子ハ猶
鉄炮ハ河純思のめも志る唐名也
大玉子ハ近才の異名なりて馬を
親仁し香れ策相下じこれうの
相詞五平原平とこれなりし也
此れとひのあそとんれとも母多
りんはをき兼とん親志あう
まもひのあそとんれとも表あ
既して夕陽西のあぬあういハ
てうく投上ケ或ハ表の内ハ仕あハ
きて大玉子の穴をあやきは日乃

軍をあらうとすやけあまをむかひ
三十五石

南に八符尾筒をたれむら

呈

勝足をひらきて実の徳ありか

晋子

源氏十羽をたせし重なる十羽を止

源氏二十五をすべかられて

こゝろも廿五羽を合せりり

源氏十羽をたせし重なる十羽を止
源氏二十五をすべかられて
こゝろも廿五羽を合せりり

晋子終焉記

李白蘇子一をう、汗漫の風よあそび
一ハ醉中ふあ中此月夜とく豪放
乃氣をゆすもたかあいまや晋子三年
の病根をたれ断やあも一二月三十日
奇しくさ胸をととさ人口く膽炙すか
白くさあ断やあも一二月三十日
けくさあももとのあはうた後信する
事なくさあおら乃ゆめかこくまき
此灯の光けう一あふ奈多事莫逆の
ちあをなれこの月廿三日實晋子小
孫をいさめあむよけり

春暖雨妙子坐の吟とて

雪乃蛇之きききつとく其角

夏の如く先此むす小徒同

秋の如く若く此此徒かやん青流

海黄あつる色の白ひくく同

冬乃くけく留れ番よ水流

角の乃大ま外よちやて角

潤れましく利おそく流

おつはれおまきあふ九条水角

一帯一亥の刻子晋子わやうさけりまきま
わりの紅ぬあまう生之罪おれ免乃以

かゝるま思いのつたを思ふさか
うれ秋乃氣河感一未及句子毫溪
禪師の九条嵐水難平身まると
き海ひ一水中の天れ一句古今符節
乃熱をつかく屋木落月此辺あけ
平石友の智つて河思ひ出さあま
おれまとのなま

青流

追悼之句聯
不令次第如尤

くろくはみハ普化の師晋子の修濟
をり谷子三十、其來ハありかき年を
あつて、く他のつをせざる、末のよ
あつて、半句、吐、去、り、く、遺、跡、を、止、め、
あ、る、を、み、ま、う、終、り、く、大、塔、院、ハ、
齊、谷、子、ハ、ハ、

中陰廻向

嵐雪

普化去、ぬ、白、い、あ、り、く、む、お、ま、

七跡

葉、如、ふ、や、仿、の、所、ま、く、果、ハ、く、か、

三日月

考、和、ろ、う、ま、の、梅、り、て、は、乃、色、ハ、

墓祭

山、谷、の、ま、を、穴、塚、乃、蘇、ひ、と、く、

齊、谷、ま、ま、九

橋、ま、あ、か、う、れ、む、れ、食、と、る、

川、骨、や、椀、り、咽、夜、半、樂、

経、乃、偈、ハ、進、新、と、ま、ぬ、ほ、と、ま、り、

加、北、除、雪、の、鳴、門、乃、内、か、り、こ、も、ほ、と、

あ、く、世、ハ、ま、あ、ま、と、紅、裏、四、天、王、乃、此、

く、り、く、あ、ひ、お、る、

洞、う、た、花、れ、身、ハ、よ、み、こ、も、る、 露、沾

ち、い、事、の、袖、り、あ、ろ、や、藤、月、 古、洞

り、く、ま、ま、と、其、角、り、屋、字、ハ、 竹、苞

世の中ははらばらと乃梅うな 沾徳
 神むの的々けしあ神うう 桃隣
 身んほや終ま^{（千六）}馬は皮さんも 神叔
 柳やや香土黒乃玉あそひ 周竹
 のまじ時梅うぬ新やを株 立永
 あ乃梅うは要を平乃下梅う
 うう終けらや

琴とこは起梅——柳三といさ 格枝
 柳うううしとそ人もよあこさ 秋航
 似借れ力や——や麻乃角 松風
 心風流をそぬきの花を惜す
 今もい月錦繡の人よあさき 千山

花つらや槐安園乃はさた園 亭令
 風祥おまふら——もふかいつのかり 香吟
 孤子方探れ
 ねーいふ物まかりハ一指頭 百里
 う好麻の角あまわは洞うを 仙化
 碑けの黄鶴樓も櫓乃殺 白雲
 苗代う口漱——はゆくろよ 海通
 うううう骨や新茶はまの色 巴人
 春ぬう網うう乃なれこうを 我常
 ちるうこいよと啼もうつて 千泉
 世もよゆれまあつと昔は法 同波

あつたあつたといふもあつたあつた

ちねむもとのもとや小石五 千江

号成中おまや傾もころり 申盛

あはつたを洗はてそり日ハ三十日 新真

文うさ乃そそハ極まろく土糸 烏桂

いつ甲る定の名あをいふはる 功悠

おまお泣尽してハ眠くは 受松

ふれ吟扇乃陽もろくハの 石雲

うる房やあいつくは斤使宜 芝筵

殊おともくめてお帳や梨の花 仙芝

雨をさく君うくあをの千里馬 指馬

茶子恥つて師はあふをうくむ

今ハあつたあつたあつたもあつたあつた 渭北

別干東戎別後其角不相見三年

今載三月清流之寄汗簡而傳角

七生別猶快々死別復如何嗚呼

角独歩諱名在惜其有器不展齋

志以没鬱鬱と郊魚傷此 大坂 才齋

草如芽何ぞそ揉くや鹿の門

ゆくも世をさるるのるさお屋 井泉

まゝ毎や座乃中うくく虚栗、以齋

高和の趣うけくやうつる房、風齋

所意をさるる報そむのひま、花齋

其うさハ風あもあつたあつた角、三惟

田舎よりまゝの晋子身揃りあうも
 ありはして三月末つゝに府へ
 田里升堂のそとこまよふに
 股引てまゝのむやまはく
 赤をまはす二月廿日死すか
 雛あ乃透をちりゆく草うを
 うねあややいに豆腐も表のま
 甲る居うき世の園を何となく
 平まい酒乃美見はむれ雲々
 なまきの傘をあつた夕まを
 その角を居して鹿も衣かの
 山ハ種海を惚つて居れ徳
 貞佐
 昌貢
 葉花
 在長
 文章
 寒玉
 到李
 常和
 羽先

石市やれいよ石を彫るよ松 梅 史
 寝る平石形よあを松のふは 是橋
 あはさき松やも今をよぬれす 岑柳
 あらさよまら指さ酒土年うを 省示
 きさかきあはれはあはれはあはれ 志鉄
 アサのさいよやうつらんまのま 嵐水
 七尺を種も墓乃あなうを 其翁
 あく降田のあつて
 あつてあつてあつてあつてあつて
 此所より年久しく恒列ぬまはと海
 うねあやう種乃あはれも神を
 三
 三六

羊力カカ...

れまもね鳥の引くを二月を 百標
隈利毛おまもむりのむ戸るを 毎雨
秘行や山吹きくくわる川 右此
為まもみ森はゆもあふ水丸園 立朝
ち柳や河はとまきくはらさお 百振
鹿乃角は銘をんまるがけいな 馬子
泪お子漸くくまに田隈かれ 吹以

曾子の羊車もあふ

いんえんよの物年 新妻乃 至 百之
蘇井あやまゆやむの掛曼 習魚
之いんえんの物ハ前也口や 志水

晋子の琴はあふけをこもせ乃ま
舞してよの風粒のくまうきいんえんくま
あふ小浪あふけくまもあふあふ

初さくくえんくま一進一退乃枯 花月
陰骨お隣」福をくまに秋うを 雪花
秋乃涙もくまのくまやけく山 洞滴
えんえんのをぬけぬや油おぬ 白漁
うお人のまも流もぬ乃のぬのくま 辰下
土お貴方様よの向や谷のあ、 甚分
的月甲おあふもまを油お丹、 籠口
迷ひ子の位も子縁るらくく 鳥道
月えんえんくまハ能お家のぬ 掃尾

宗の親也は浦田の...
子をおく...
むふ

祝も子元日一人や...
晋子...
以乃判子...
思ひあは...
早竟廣漠野の牛...
月鞭...
そ何有は...
注洲

密永元甲申文月十八日

我菴も...
是ハ...
なりや...
とも...
一...
い...
と...
き...

あ...
あ...

百韻

花の雨袖を板間を裂く

冠里

梅の影を母顔に写す

秋色

登りしハラス架かちり足忘小

嵐雪

直衣を片ひき廻るすく

松風

吃汁をわらうとて雲あ

岩翁

かううもあそふ筆白ふ

清流

の月よこの松傘とわけて

千山

平沙の若ふるハ足之輕

大町

秋也領鑲二寸と秋乃肌

山峰

いれとてお領此稿

一雀

河骨此を信ひは腮上

朝更

如く程のほお所汁如き

序令

藤衣巾もひ袖うわす

百里

妙をうと名てくハあん

白雲

短板よおハありく

風葉

是ちらんいと三上り

我常

取あふん子向ま

周竹

涼のまきろふ陰

仙化

なつう程の條りま

立永

ハ六神も中

立朝

明月ハ庭ぬ合点

桃隣

砂ハ何つう

指馬

香の留や若菜秋の香を結うけ
御よつふく至中乃馬
川の如きもよかのゆめをこよ
海を立をまてて新より一を
紅顔も紅井岸の吹とろ一
福乃唱日ハまのも終るに
老の寄物十一所、ゆるとよけり
五山いつとと大釜ふ櫛
借浪を二月子也此雪をまふ
骨をうけて廻る閑札
全許はととと出て皿の行
下名のなき蔓草前子香

沾刈

済通

菜花

寒玉

文筆

到李

仙芝

車盛

鬼株

同彼

沾徳

執筆

たへ々神代の月乃花はるる
若命をちめて度は身は秋
ひらぬも今も大万丰の籠子
四角用十人下北州をこしる
栢の香日袋衣けしる三輪の曲
てきめんていこ 鯛ツノコもまね
通ツノコもくもくもいまハめくも
すくくぬやうも石白をまね
舞衣乃とよくふまこ一ヤト
傳楽の足見東帯てまね
まのつあくか夫婦ぬつくはを能
秋もくも能は秋風より、能

清流

嵐雪

済通

立水

序令

沾刈

白雲

周竹

栢風

沾徳

秋色

風葉

連雀乃の葉さうりや下ろしん
 伊丹の玉さる月お弱し
 高那美子やけてそ思ふおの波
 三 雛おひらとておしりやめ
 出たらしおき葉の市ハヤ口
 三 舞ぬまゆれ後乃後物
 中よ又序山のま流アサ
 活所の新葉子千木の遍道
 経てて綻ひさうし一あ
 ちさも千うねる蟹子脈の
 饅頭乃田舎とくく日ハ十日
 ちむあはたあ世同り一とき

車盛
 仙芝
 周竹
 百里
 立朝
 桃隣
 指馬
 文竿
 同波
 沼徳
 寒玉
 音流

夫名も借もくく毫の多ひそ
 思ふおとと控れ鷓鴣一班
 塵ほもほ達ハまらぬ葉お日
 志田をさる指下入月
 淋しいをさるしをさる秋
 三 常厚のくと舌風呂乃経
 面白し如來の者を寺とり
 車乃乃多と指お指し
 祝高て一代あまを日よ白
 中判ほおふをを想けく
 い(く)こよ内乱おれも後通
 百合の光りも我をさる

到幸
 指馬
 桃隣
 序令
 立永
 立朝
 白雪
 風葉
 嵐雪
 仙化
 活判
 周竹

肩衣御^名之智^名也^名言^名松^名の枝^名
 九軒^名のそ^名鹿^名ハ念^名の念^名入^名
 金耳^名此^名是^名てハい^名と^名行^名思^名ひ
 月^名と^名も^名海^名の^名井^名戸^名留^名如^名瑞^名
 何^名の餅^名ハ身^名と^名こ^名い^名ろ^名の^名あ^名そ^名と^名也^名
 手^名指^名御^名是^名の^名角^名カ^名ん^名と^名の^名
 洛^名外^名は^名ふ^名や^名お^名こ^名う^名あ^名な^名し^名と^名
 つ^名か^名堂^名の^名く^名か^名と^名う^名高^名名^名
 後^名毫^名乃^名と^名ら^名く^名あ^名や^名く^名り^名新^名
 破^名和^名の^名湯^名の^名山^名々^名あ^名ら^名く^名ぬ^名
 前^名岳^名の^名ま^名ま^名び^名る^名虫^名の^名顔^名つ^名と^名
 草^名蒲^名周^名の^名ハ^名引^名舟^名此^名坐^名入^名
 沾^名洲^名

兄^名乃^名成^名ニ^名寸^名地^名を^名ハ^名ひ^名こ^名ち^名節^名
 物^名々^名を^名せ^名ぬ^名め^名代^名り^名し^名ま^名
 計^名之^名也^名は^名我^名孰^名か^名あ^名る^名ハ^名い^名つ^名と^名そ^名
 む^名す^名何^名と^名も^名か^名け^名る^名芝^名海^名色^名
 一^名面^名は^名新^名く^名ら^名紙^名と^名ら^名別^名也^名
 合^名羽^名ハ^名結^名る^名物^名と^名を^名い^名と^名と^名
 八^名町^名ハ^名も^名も^名ら^名り^名と^名也^名油^名の^名同^名
 古^名朝^名の^名か^名ら^名芥^名子^名は^名折^名込^名
 白^名鶴^名子^名乃^名瓶^名此^名瓶^名小^名月^名と^名照^名
 我^名國^名の^名南^名洋^名の^名水^名秋^名
 銷^名香^名は^名銷^名好^名家^名此^名家^名あ^名く^名
 門^名牙^名は^名乃^名や^名極^名ぬ^名楯^名

山曉ハとくく 踏破と思ハるく 秋色
鼻こくく 揺く 踏も汚き 清流
富れ目の 妙なる 名字ハ 五年 摺 貞佐
浄ろくく 金入て 閑世も 仙若
住吉ハ 矢見の 女も ち乃 夢 江洲
柳のくく 鴨ハ けい さま 寒玉

右百韻四月十八日深川

泉竜院よりくく 七七日之

追善各満坐

百々日 追善各満坐

百々日 追善各満坐

追善各満坐

追善各満坐

追善各満坐

追善各満坐

今日施僧即事

追善各満坐

跋

在而堂其角成ハ寶井ハ年四十七日く
世ハくく ぬをさくく 二本 校上 行 寺

小ころりて夜臺をなみ知友門人石碑河
 建じ事をものそび然りとていともさか法も
 とくあをなれあもくゆらけはあふふよと
 て深川長慶寺は芭蕉と羽乃塚あり
 らもふ懐のそく一々此上饅頭をきつて
 晋子病床よりを眼の達乃乃像一帯を
 書みちりと廓然不動の因縁とやとん
 けしけけあはくくすかいら和尚閑暇の筆
 紙画して去乃佳城のくふおけあふととれ
 のくすあに夕名目景よりや又去乃
 三巻ハ晋子ふあふ席をうけぬあふひハ
 身、たふとくはか新話をつつと叙景ハ

五味を啗て類棋子と名つてきつてと全篇
 ねりける中よ病中もくあふくつあよ空齊
 けるこみとかなぬ嵐音松風沾洲夢流とひ
 とあふくはききと乃及古とああつあふくをあ
 けしあやうく一集よあさびらととけとよ
 くましあまめく門あきいほらく也秋をを
 りあふのあふくもくくくあふあふあひり
 あつあふく忘日祥月あ志はとあひいあふ
 あくもあふくああふよ晋子あふあふ月よ
 鍊の切あつてあふあ艶麗禪河減あ一英
 を咀きをあふく句くの清新来はいあふく
 真ふ當せ乃一珍藏あつてむあふ紙奥のす

其ふをいひもほいなりを最後らつてあはれ歩
 けりて授けし集とかなぬ千山朝叟うたふ
 きて中もよほし未終る追悼れをいつ
 ねて吉田氏うたよ海をせうあはれ持ちらる
 けりてあはれ集を文車子のするものなり
 あはれ人よつてあはれをせよつて人を終り
 子達して断續の情音よつてあはれあつて

丁亥冬季上院

篁影堂沾洲
 菊后亭秋色
 阿桑門青流

指おろし温繁れ月の焙物 秋色
 毒汰約瓶のきこぬ根と終 貞佐
 瘦さくし移文いと川小直と持て 沾徳
 五つ智をこれちまらぬ 金傘 青岷
 なくさしい川くろくろく丸の瑞 仙鶴
 新市のあしとるきと林の氣 序今
 提乃本くちあ形と吹く 沾洲
 春は乃よいのちうれ一色 執筆
 ちりてあはれ集をせよつてあはれあつて
 徳 岷 色 佐

日言くも 歛すめし 貝つり
 老翁んとし 多しと 又ふと 采
 物して 汁煮てし あり 亭のし
 承も 自利す あり 小の月
 花さうも あり され 可ま あり
 待り あり され 簣海苔 あり
 飛蟻の あり あり あり あり
 法備 金と 加 籃 あり
 少は あり あり あり あり あり
 松を あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり
 あつ あり あり あり あり

令 色 測 佐 峨 河 令 佐 松

昔生るもの あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり
 未 あり あり あり あり あり
 悪く あり あり あり あり あり
 月代の あり あり あり あり あり
 羨の あり あり あり あり あり
 勸学の あり あり あり あり あり
 小里人の あり あり あり あり あり
 人 あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり
 美の あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり

峨 色 測 令 色 測 依 合 色 霍 令 測 霍 色 峨

水仙と草

冠里

流吊人望来りれ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

春草生は比晋子年三回

年々小叔こそ秋草盛るる事 如蒿

角法師去りて十三雨琴竹のこ

名の春々ハ人々をうりてままた

天上の道眼をみるこえん

琴の糸めらるゆりふれふのふ 楢李

うの事其角をえは旧友虎琴り

一醉ととに一むし

春雨や足あゝる置の洗りと 波星

水水や海苔り流りく二むし 風洗

鹿之角落て増ねや草の種 松残

桶をづくろのさしけふ乃寺の門 楸下

琴風
序令
長慶寺

事、此の八日、こ親むく、公、公、生を
去、十月廿六日、志、あり、是、ぬ
何、于、時、其、角、嵐、宮、と、十三、日
晋子、八、事、か、れ、し、俳、友、の、悼、も、歌、り
都、の、使、も、ら、り、し、

向、あ、ん、ん、ぬ、せ、の、人、よ、酢、こ、草
朝、諾、の、て、く、風、さ、や、貴、子、の、上
光、陰、乃、中、き、る、こ、え、雪、を、人
酒、と、漉、了、十、は、ち、を、白、一、冬、の、古
葉、の、芽、や、と、れ、と、妹、は、心、と、孫
百里
齋谷
沾石
海宇
蓮之
只尺

杓、托、り、ち、や、九、日、乃、道、乃、友
子、月、の、あ、ま、を、と、く、く、歳、の、ぬ
焼、き、れ、上、は、結、し、て、卷、乃、中、を、人
さ、や、に、え、ぬ、お、れ、も、を、在、り、耳、に、物
月、月、の、こ、ち、へ、旋、回、を、ふ、さ、り、と、り、と
名、子、字、や、と、の、風、流、と、志、く、ふ、し、
晋子、の、句、と、り、と、更、光、陰、と、思、ふ
向、く、く、小、田、代、と、花、乃、枝、未、寺
苗、代、小、古、唐、も、れ、く、水、鏡
口、能、き、の、あ、る、ほ、く、く、と、る、松、葉
子、の、表、と、夏、や、防、風、の、砂、の、流、り
連、竟、の、今、も、く、帯、ひ、く、り、墨
月下
壺月
晋如
安士
文東
叙梁
氷丸
倚窓
秀宣
以六
文霄

老てぬやまゝお生乃松の花 百船
帙と争てんーと少ーともの子 甫盛

白ふもいと香こと長者の大橋 澤北カラス山

去つて今おえーる上戸梨の心 晋承燕成

ういすや別の利益此報謝丹 我尚全

片町とて孫て出まを防風賣 猿栗全

獅子响や蒼ちり星乃江痛病 角戸

むすふまはりあきき此發着は敵牛

いさ花の奄と回らや乃小紋帳 蘭砍

名のふれ土氣残んふれまじー 李投

不ーいーく隊で八專や定りい 李卿

まゝの一日乃ふいーいーいれ 其道サ
派と吹回探のれうはくまー 泉文全
川草の萌おれ夏や古きま 露周全
蛙子の出離まゆ南利身延房 立推カス
棠のふり誦経とすん今やの 里堂カ
峰の棠の目くに和讀も新し 素秋カ
実もとも園や廣乃株投の房 専之全
線香の子澤芳ーつか草 百詩全
法海味啼よ首ハまー供物 牡仙全
連翹やいーもかーとふ移り供養松吟全
棠の花の膝まゝゆるや竹の雨 非琴秋田

まかろーのちろろそのまき草紅且
長成ミナナルいか？やと野の凡中の鱈其舌

誰も一字のけんが及ぶべし
何れや終おはるるへー

是吉とも次てふおし蝶乃反白雲

暮よやちの橋も小さうつ何虹

守さ法り防風や野をま何竜

蓮翹のそほふこを冬の末何文

如意ふよや其智煮たぬ蔵のも梅志

み中小裕ふ白ふくくいい旬沾洋

まとのく其末の者をた乃葉文丁

突ハ強不言のをくくや亦也不ト童

廣宣乃所ハん初す日も木の芽ち千竹

朝来風や草いこりうう花を血沈詳

まやいりぬの葵はまの幸い巴水

そのまや文をむろもて吞人凡可水

居士十三周子及令行
云切くさくさ白無正行

墨の香やせふもいの幸むとあ沾洲

まやむいーさうに丁字のり話を周竹

むい言も事物當然あらじく青職

名号の香をまのめらて板石園女

くの矢乃種芋おれくの如自依

晉の事の初祖係ありと
古事考の墳墓ありと

面壁して四つを足す手つゞく

仙鶴

追加

生死やのこれ男の年八卦羽列、水見

石の肌移すも、まなくもふさか羽列、秀塘

角茅の白髪もかゝぬ根全、硯洲

夏深く腫とぬく人眼後全、鶴洲

春も深ぬ十三經のほちち、沾徳

梨花も春は振る茶汲、秋色

さけふ交の人と如と築、沾洲

古抄又れ同とさお次川面、晋如

夏陰を射れ、さや子船の月、壺月

ウ、出むう人山を舞、青娥

雲煮て人を帰ふに、月下

いひ揚うと九壻強、貞佐

名物て今も寄暑、蓮之

筆か、只尺

志のこくを繪鴻へ、加

虚言紙巻、下

西地骨子遺編新稿子
の右様紙色持以て
物々々々々々々々々々
物々新稿子取いて花
刺乃所一頁紙得る海
々々々々々々々々々々々
たのめ々々々々々々々

612

11

西地骨子遺編新稿子
の右様紙色持以て
物々々々々々々々々々
物々新稿子取いて花
刺乃所一頁紙得る海
々々々々々々々々々々々
たのめ々々々々々々々

11

可もたして一そつて一人の勢も
よふに身もよふ初相子の發
のにこつて一そつて一人の勢も
よふに身もよふ初相子の發
のにこつて一そつて一人の勢も
よふに身もよふ初相子の發
のにこつて一そつて一人の勢も
よふに身もよふ初相子の發

事の白ハ濁よえ玄宗帝に
くやしら其角ハ濁よえ妙房
にたしく太常一書あに
しららんばとこも女持物
死し假氣はふふ之今
年十三回やまといふ所
とこれとついで遺編法
のこ今これといふ脚あり

物とし今此の僅尔退
如く時乃の詭計有
程りと事一不判

治徳跋

享保四己亥稔冬季上浣

江戸日本橋南一丁目

一力屋清兵衛版

